

『社会言語科学』特集論文募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、以下の要領で特集「談話研究の社会貢献―身近な現場から世界まで―」の論文を募集いたします。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。

特集では最終投稿期限が設定されていますが、投稿論文は基本的に投稿され次第、査読作業に入りますので、より早く投稿された論文ほど査読が早く進みます。なお、刊行時期までに採択とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください。

特集論文の最終投稿期限：2023年9月30日（土）

掲載号の発行：2024年9月（第27巻第1号に掲載予定）

特集論文の投稿先：電子投稿システムを通じて投稿してください（HPの「学会誌」ページ参照）

談話研究の社会貢献

―身近な現場から世界まで―

担当エディター：

大場 美和子（昭和女子大学）

嶋 ちはる（国際教養大学）

中井 陽子（東京外国語大学）

増田 将伸（京都産業大学）

社会言語科学会では、「言語・コミュニケーションを、人間・文化・社会との関わりにおいて取り上げ、そこに存在する課題の解明を目指します」（ホームページ「学会概要」）という設立趣旨が掲げられている。さらに、本学会の初代会長の徳川宗賢氏は、研究成果を社会貢献に繋げるといった、ウェルフェア・リングイステイクスの重要性を指摘している。このウェルフェア・リングイステイクスについて、J. V. ネウストプニー氏と対談する中で、言語研究によって「社会に貢献することも考えるべきではあるまいか。そしてこれまでの研究成果をどのように社会に役立てるか、足りないところはどこなのか、そういうことを考える時期になっている」（徳川、1999: 90）と述べている。そして、徳川（1999）によれば、ウェルフェア・リングイステイクスは、「言語障害、小言語問題、方言、アイデンティティ、老人語、差別、女性語、言語教育、表記、情報機器、情報選択、言語管理」などの多様な研究分野・課題に繋がらうという。そこで、本特集では、このウェルフェア・リングイステイクスの理念に基づき、これらの研究分野・課題にも広く関連する「談話研究」に焦点を当てて、その社会貢献について議論する論文を募集する。以下、詳細について述べる。

ウェルフェア・リングイステイクスを目指しつつ、言語・コミュニケーションに関する課題を解明する研究には様々なアプローチが考えられるが、その1つとして談話研究が挙げられる。談話研究とは、個々の発話や文以上のまとまりのある談話レベルでデータの分析を行う研究である。対象とする談話データも、自然談話、ロールプレイ、談話完成法、コーパスなどのデータのほか、新聞・雑誌などのメディアのテキスト、SNS (Social Networking Service) といった音声や文字でのやり取りのデータなど、多岐にわたる。こうした談話データを分析対象とする研究は、言語学、心理学、社会学、教育学、文化人類学、認知科学、情報工学など様々な分野で行われており、それぞれの分野において研究のアプローチも異なる。

談話研究が取り組む課題は研究分野や分析観点によって様々であるが、社会的な側面の強い課題が取り上げられてきている。例えば、社会の様々な場面での言語・非言語行動によるやり取りのパターンやコミュニケーションの特徴の解明を目的にするものもある。あるいは、談話の構造、展開やプロセス、会話参加の過程や、参加者間の人間関係、アイデンティティのほか、談話の背景にある権力構造や価値観、イ

デオロギーなどを明らかにしようとするものもある。このように、談話研究は、社会の文脈や人間関係、相互行為に関わる分析を行い、社会の様々な場面で何が行われているかを浮き彫りにしうるものである。そのため、社会の実践を解明するといった可能性を秘めている。

さらに、談話研究は社会の実践の解明に留まらず、社会貢献をもなす。社会貢献とは、社会の中で人々が日々の暮らしを営む実践現場へ研究成果を還元することである。談話研究による社会貢献の例としては、専門家と非専門家といった参加者間の不均衡な役割関係を明らかにし、当該場面のやり取りを改善するといった試みが考えられる。また、日常会話の特徴を分析することで、それを語学教育の授業活動や指導項目の参考にしたりすることもできる。したがって、談話研究によって、こうした言語に関わる様々な課題の解明を行い、社会貢献に繋げることで、ウェルフェア・リングイスティクスを実現することが可能であると考えられる。

過去には第16巻第1号(2013年9月)において、「ウェルフェア・リングイスティクスにつながる実践的言語・コミュニケーション研究」が特集されている。これ以降、およそ10年経ったが、ここで談話研究に焦点を当て、あらためてウェルフェア・リングイスティクス、特に研究と社会貢献の関係を明らかにする研究の特集を行いたい。よって、本特集では、社会貢献の段階まで具体的に踏み込んで言及している談話研究の論文を期待する。例えば、言語データの分析結果をふまえ、そこで明らかとなった課題に対し研究者がどのように社会貢献ができるのかが具体的に示されている研究、実践現場で問題の解明と改善を試みた研究、などが考えられる。

そして、この社会貢献は、談話研究の成果を、我々の日常の身近な現場だけでなく、世界にまでさらに視野を広げた様々な実践現場に還元し、貢献していくことを目指す研究も想定している。

まず、身近な現場の研究とは、身の周りの実践現場で用いられている言語を分析対象として、その成果をその実践現場へ還元するものである。例えば、医療現場での医者と患者、高齢者福祉施設での介護職員と高齢者などの会話をデータとして詳細に分析し、その成果を医療や介護に関わるコミュニケーション教育に活かそうとする研究が考えられる。また、日本で働く外国人社員の職場でどのようなコミュニケーションを行っているかを分析し、その成果を社員のコミュニケーション改善に繋げようとする研究もある。

さらに、世界に視野を広げた研究とは、談話研究の成果を広く世界の様々な実践現場に還元しようとするものである。例えば、異文化間コミュニケーション、国際間でのオンラインコミュニケーション、外国語教育、SDGsの取り組み、ビジネスや政治における国際的な交渉などに関する談話データを研究するのが考えられる。前段落で例に挙げた外国人社員の職場でのコミュニケーションに関する研究成果も、その実践現場だけでなく、広く国内外のコミュニケーション改善や言語教育にも活用すれば、身近な現場から出発し、広く世界までつながる可能性がある。このように、研究の出発点が自身の実践現場での課題であっても、その課題と研究成果がより広い社会、ひいては世界における多様な実践現場にまで波及していくことを念頭においた議論を展開する談話研究の投稿も想定される。近年では、オンラインツールの普及もあり、人々のやり取りの範囲はグローバルに広がっているため、世界が身近な現場にもつながりうるだろう。

このような社会的・世界的な動向のもと、国内の文脈はもちろんのこと、視野を世界にまで広げた社会貢献を扱った論文が寄せられることも期待する。本特集によりウェルフェア・リングイスティクスの理念を再確認し、学際的な本学会における多様な談話研究の、身近な現場や世界での社会貢献の可能性を共有したい。

参考文献

徳川宗賢(1999). ウェルフェア・リングイスティクスの出発. 社会言語科学, 2 (1), 89-100.